成田山の五大明王像

昭和 60 年、京都大仏師松久宗琳が彫像した五大明王像の開眼法要風景。

奉　納　鑿

昭和 59 年（1984 年）松久宗琳大仏師の道具一式が仏像の胎内に納められています。
又胎内には不動明王の本地仏である胎蔵法の大日如来と彫像願文が納められています。
松久朋琳　宗琳父子は、光雲堂の鑿を使用していた。

「寳割法」

五大明王は「寳割法」により制作された。不動明王像は４３個に分割されている。
運慶が始めた技法であるがしばらくの間途絶えていた、この技法を大仏師松久父子が復活させた。
不動明王の胎内には大仏師　松久宗琳の道具一式[光雲の彫刻鑿]が奉納されている。
272.7cm の坐像で火焔を含めた総高は 6 m をこえる巨大な尊像です。

寳割法という工法を用いた 43 の部分からなる寄木造りで、岩絵具を約　１００種類使用した上に截金（きりがね：金箔を細かく切ったもの）による装飾が施されています。胎内には不動明王の本地仏（教えの根本となる仏）である胎蔵法の大日如来と彫像願文が納められています。

胎蔵法の大日如来の教えを姿かたちで現しており、火焔はカルラ鳥という毒竜を食する鳥のかたちをしているので、カルラ焔とも呼ばれ、人々の煩悩を焼きつくすことを意味し、このことから智慧の焔といわれています。右手に持っている剣は、煩悩を断ち切り、左手に持っている索は、すべての人々を包容し、すべての障礙（しょうげ：障害・妨げ）となるものを縛って自由自在に活動することを現しており、座っている岩は何事にも動じない悟りの心の強さを現しています。額のシワは悪魔に対して怒り、人々を思いやる心を現し、左眼を半眼に閉じているのは、左道（誤った道）を封じて正しい道に入らせることを表現しています。牙を出しているのは、あらゆる困難や障礙（しょうげ）を噛み砕く姿を、口を閉じているのは、無益な言葉を発しないことを各々象徴しています。

障礙（しょうげ）＝仏教では、悟りの障害となるものをいう。